

桓武天皇と仏教に関する一考察

北京外国語大学 黄瑜瑩

1. はじめに

天皇は、「神道」において、日本古来の神々の子孫に位置付けられる。その一方、日本の歴史において、天皇と「仏教」の関わりは見過ごせない。『日本書紀』により、552年に仏教が初めて日本に伝えられ、欽明天皇が蘇我氏に信仰を許可した。7世紀前半、造寺造仏が権力の象徴となり、貴族や天皇家が競って寺院を建てるようになった。7世紀後半、「大君は神にしませば赤駒の腹ばう田井を都となしつ」といった和歌が作られ、聖武天皇に「天皇」号が使用され、天皇が「神」と位置づけられるようになった。同時期、聖武天皇は、仏教の鎮護国家という考え方によって、国の災害や問題に対応した。8世紀前半、鎮護国家思想が盛んになり、神仏習合が始まった。平安時代になると、神仏習合が盛んになった。このように、天皇と仏教は密接に関係している。しかし、神の子孫と位置づけられた天皇は、なぜ仏教を信仰したのだろうか。

日本古代仏教史について、制度の検討を中心とした国家仏教論のほか、教学や宗派についての研究も数多くある。吉田一彦氏（1995）が「統治の正統性」を明らかにしたいという課題を提起して以来、天皇と仏教の関係についての研究も進められてきた。特に、平安時代以前を対象とした研究が多かった。平安時代を中心とした研究は、堀裕氏や駒井匠氏の研究がある。

これまでの研究をみると、近年の仏教史研究においては、桓武天皇と仏教については論じられているが、次のような理由から、更に深く検討する余地があると考ええる。すなわち、平安時代で最初に仏教関係の改革を行った桓武天皇は、天皇家の正統な血筋を引いていないとされたため、積極的に律令制の再編を行うなど、権威を確立しようとしたことが考察されてきた。桓武天皇の仏教政策の波に乗ったのは天台宗だと知られているが、従来の研究はこれに触れなかった。

桓武天皇は極めて特別な存在で、仏教と関連付け、天皇権威の向上についてさらに研究が必要があると考ええる。日本古代仏教史研究に対して、吉田一彦氏が指摘した課題を念頭に、これまでの研究を承け、本稿では桓武天皇が行った政治を取り上げ、それと天台宗との

関わりを踏まえ、権威の強化と関連付けて論じる。

研究方法としては、「文献調査」を主な研究方法としたい。

2. 桓武天皇と天台宗

2.1 桓武天皇の行った政治

光仁・桓武天皇の即位で、天智皇統が復活した。この皇統交替に加え、生母の高野新笠は百済系渡来人氏族の出身であるため、血筋が悪い桓武天皇は、積極的に律令制の再編を行ったように、権威を確立しようとし、数々の政策を行った。以下、蝦夷征討と天台宗支持を取り上げる。

まず、律令国家の支配権を広げるために、桓武天皇が蝦夷征討に取り組んだ。789年から803年にかけて3度も行われたが、801年の3度目の遠征で、坂上田村麻呂が征夷大將軍となり、ある程度の成果を遂げた。

文化面では、新しい仏教を求める桓武天皇は最澄及び天台宗を重用した。日本の天台宗の開祖は最澄と知られている。『最澄（日本思想大系 4）』によると、『延暦4年（785）春、南都東大寺の戒壇に登って具足戒をうけ、大僧の資格を得た最澄は、なぜかその年の7月、突然世の無常を觀じ、比叡山に登って樹下石上の生活に入った。彼の入山に当って、その決意を述べたものが、すなわちこの『願文』一篇である』という。最澄は、『願文』において、衆生を度して仏国土を浄めんなど書き、南都仏教に対して背を向けていた。民衆の救済に重きをおく最澄が出会ったのは天台宗であった。腐敗していた南都六宗を牽制する目的に一致していたことは、桓武天皇が天台宗を選んだ理由であると思われる。804年に桓武天皇が最澄を還学生として、唐で天台宗を学ぶように差し遣わした。

2.2 蝦夷征討と毘沙門信仰

鎮護国家という仏教の機能は、平安時代以降にも期待され続けていたと思われる。奈良時代には、『仁王經』と『金光明經』が理論的支柱とされたが、平安時代には『法華經』が加えられ、これらを『護国三部經』と呼んだ。毘沙門天は仏教における天部の仏神で、顕教にも密教にも取り入れられたため、多くの經典に見えるわけであるが、『法華經』などの護国經典に毘沙門がみえる点には注目したい。毘沙門は、唐では武神・護国神という性格をもつ

ていたが、日本では毘沙門を武神というよりも、護国神ということが多かった。ここで、筆者は、蝦夷征討と関連付け、毘沙門信仰における「必勝祈願」という性格を考察してみたい。

毘沙門信仰について、呂建福氏の『中国密教史』の中で、『唐の毘沙門信仰は、西北部族への用兵及び皇室の密教への信仰と深い関係を持っている』（拙訳）と書かれている。唐にわたり、西北部族との戦争が続いた。当時は遣唐使が盛んに派遣されていたことから、密教を中国から取り入れた日本でも毘沙門信仰に対して「必勝祈願」という考えをもっていたと考えられる。

さらに、東寺にある木造毘沙門天立像は、平安京羅城門に安置されていたとされる『東宝記』をもとに、木造毘沙門天立像を請来した者は平安時代初期（特に平安建都の頃）の入唐僧のいずれかであるとされている。詳しい年代に対する考察が必要であるが、平安遷都は794年で行われ、桓武天皇による蝦夷征討は789年から803まで行われたことから、桓武天皇は蝦夷征討にあたり、毘沙門を信仰していたと考えられよう。

2.3 天台宗支持と権威向上

「桓武天皇の行った政治」で述べたように、南都六宗を牽制するために、桓武天皇が天台宗を選んだと思われる。しかし、筆者は、もう一つの理由として、天台宗を一つ的手段として、権威を確立しようとしたのではないかと考える。というのは、生前より神格化の芽が既に存在した聖徳太子は天台宗及び最澄と深い関係があるからである。

天台宗のよりどころは『法華経』の教えであった。最澄以前、『法華経』を重視した人物の中に、聖徳太子がいた。『日本書紀』により、606年、日本仏教の開祖とされている聖徳太子が法華経を講じたという。615年、法華経の注釈書『法華義疏』が聖徳太子により著されたとされている。このように、聖徳太子の権威のため、天台宗がより一層受け入れられ、南都六宗の牽制だけではなく、桓武天皇の権威強化に利用されたと考える。この推測を支える根拠として、最澄が著した『註金剛鉤論』がある。その序に、聖徳太子は中国の高僧慧思の生まれ変わりであると説いている。仮にこれは最澄が在位者の支持を得るために書いたとすれば、間接的に桓武天皇の聖徳太子に対する態度が窺える。そうでないとしても、これが桓武天皇が最澄及び天台宗を選んだ理由であるという推測もできよう。

桓武天皇と聖徳太子との関わりのもう一つは、昭和11年に発見された北野廃寺をめぐり、

北野廃寺の前身への研究で、少しずつ明らかになってきた。

昭和 52 年の北野廃寺での発掘では、「鵜室」の墨書のある陶器と「秦立」の墨書のある土器が発見された。「鵜（いかるが）」から、斑鳩寺を建立した聖徳太子と関連づけることができる。また、『日本書紀』には、秦河勝が聖徳太子より仏像を授かり、蜂岡寺を造営したとあり、「秦立」の土器の発見を説明できたといえる。

一方、昭和 54 年の北野廃寺での発掘では、「野寺」の墨書のある平安初期の土器が発見された。京都市埋蔵文化財研究所の網伸也氏によると、東西二寺の造営が桓武朝より遅れることを考古学的に証明でき、東西二寺ができるまで初期平安京の官寺としての機能を担った寺院は、桓武天皇によって建立された常住寺(野寺)であるという。また、『「広隆寺縁起」などによれば、平安遷都の時に寺地が京内に取り込まれたため、寺籍を移して広隆寺(蜂岡寺)と統合したようです。北野廃寺の旧伽藍は官に接收され、右京北郊に接した新たな官寺である常住寺となったのでしょうか』とも述べている。桓武天皇は遷都にあたり、秦氏の支持を必要としたことから、秦氏の寺院を認めたことは想像に難くない。秦氏が建立した寺は蜂岡寺のほかにも存在していたにもかかわらず、桓武天皇が蜂岡寺を選んだのは、おそらく聖徳太子の権威を利用しようとしたからであると考えられる。

3. おわりに

本稿では、桓武天皇が仏教と関わりをもっていた理由に着目した。腐敗した奈良仏教が嫌いであった桓武天皇が、なぜ仏教を求め続け、さらになぜ天台宗を選んだかについて、桓武天皇の政治対策をふまえて考察した。その結果、桓武天皇が天台宗を選んだのは、蝦夷征討の勝利及び権威の強化を図ったことが理由であると推測された。

しかしながら、筆者は天皇と仏教について、まだ知識に欠けるため、本稿は未熟の考察である。また、東寺毘沙門天像の羅城門安置説に関しては、岡田健氏が文献、美術史的に詳細な検討を加え、否定的な意見を発表している。本稿での議論は羅城門安置を前提としたものであったため、改めて検討し直す必要があると考える。今後、知識を深めつつ、さらに考察を進めていきたい。